

【付記】

本稿発表後、本論中、「潜談」と解釈したところは「讃談」ではないか、との指摘を受けた。字のくずし方、意味から考えて、「仏徳などをほめ語ること。称賛して語ること。また、その説法」（『日本国語大辞典』）の意である「讃談」と読むほうが、確かに正しいようである。私の勉強不足・認識不足を恥じ入るばかりである。ただし、「潜談」と解釈したところは、俗人が俗家にて法会や説法を行うことを指しているので、「讃談」が正しいとしても、本論文全体の趣旨を変更する必要はないものと考ええる。

なお、寛政九年二月朔日付の触の同箇所は、明らかに「潜談」と読めるうえ、それ以降の触も「潜談」と書いてあるのではないかと思える箇所がある。この場合も、本来「讃談」と書くべきところを「潜談」と記したのではないかという気がするが、寛政期以降、俗人が俗家にて行う法会・説法は潜んで行うものとイメージされた、との解釈も成り立つかもしれない。いずれ本稿を含めて単著としてまとめる際に訂正するなどして、対応しようと思う。

大橋 幸泰